

会長挨拶

会長 北野利夫

大阪市立総合医療センター

小児整形外科

このたび、平成29年（2017年）6月23日（金）と24日（土）の両日にわたり、第56回日本小児股関節研究会を、大阪府中央公会堂において開催させていただきます。整形外科医となってから30年近く小児股関節診療に深くかかわってきました私にとりまして、伝統ある日本小児股関節研究会を主宰させていただくことは身に余る光栄であります。また、大阪市立大学整形外科同門といたしましても、昭和61年（1986年）第25回の廣橋賢次会長に続く2回目の開催となることを誇りに感じております。

本研究会は昭和46年に先天股脱研究会として発足しています。小児股関節疾患の代表格である先天性股関節脱臼（発育性股関節形成不全、DDHと呼ぶことが多くなりました）の国内発症は、長年の先達のご努力により欧米先進国並みに減少しました。しかし、歩行開始後に発見されるなど診断遅延例の増加が昨今問題となってきています。今回、このDDHの早期診断と、将来において、移動・運動機能を著しく低下させる変形性股関節症発症の予防、診断・治療の考え方にスポットを当てて2つのパネルディスカッションを設けました。

1つ目は「成人への橋渡しとしての小児股関節（DDH）治療（日本小児股関節研究会編）」です。第43回日本股関節学会会長の飯田寛和先生が学術集会のプログラムとして開催されたシンポジウムの日本小児股関節研究会版です。小児整形外科医だけでなく、成人運動器を扱う整形外科の先生方を交えて、生涯を通じたDDH治療の考え方について討論していただきたいと思います。

2つ目は「早くみつけてあげたい、股関節脱臼」です。診断遅延が問題となっている乳児期股関節脱臼を早期に診断するためにどうすれば良いのか、を整形外科医だけでなく、新生児・乳児股関節の検診や診療に携わる、産科医、小児科医、コメディカルの方々を交えて考える討論会として、研究会内プログラム『乳児期股関節脱臼予防早期診断シンポジウム2017』内に設けました。

「小児稀少疾患の骨盤×線像」（西村玄先生）、「小児骨盤骨切り術のあれこれ」（亀ヶ谷真琴先生）、「オートファジー研究の発展から見えること」（吉森保先生）、「思春期から若年成人における股関節治療—股関節鏡手術から骨切り術・人工関節置換術まで—」（大原英嗣先生）に加えまして、『乳児期股関節脱臼予防早期診断シンポジウム2017』内に「乳児期の股関節脱臼はエコーで診断出来る」（藤原憲太先生）、「股関節形成不全スペクトラム—乳児健診医を惑わす様々な病態とその臨床像—」（会長講演）の6つを教

育研修講演として予定しています。

DDH早期診断の重要性周知の一環として、生後2カ月の早期にDDHの治療を受けられ、その後トップアスリートとなられた元マラソンランナーの有森裕子さんに市民講演「よここびを力にー私とスポーツと運動器ー」をお願いいたしました。

会場の大阪市中央公会堂はその美しい外観と内部のデザインから2002年に国の重要文化財に指定されたネオルネッサンス様式の歴史的建築物です。大阪の中心、北に堂島川、南に土佐堀川が流れる中之島の中に佇み、水の蒼と木々の緑に映える美しい外観は6月のこの季節にきっと映えることでしょう。その歴史的建築物の落ち着いた雰囲気の中での討論を通じて、小児股関節疾患の新生児期・乳児期を含めた小児期から思春期、成人期までの月齢・年齢に応じた対処方法を、みなさんといっしょに考える学術集会にしたいと考えております。